

第VI章 遺構・遺物の検討

第1節 いわゆる亀井産の土器の検討

——畿内第Ⅲ様式古段階の土器を中心に——

1 はじめに

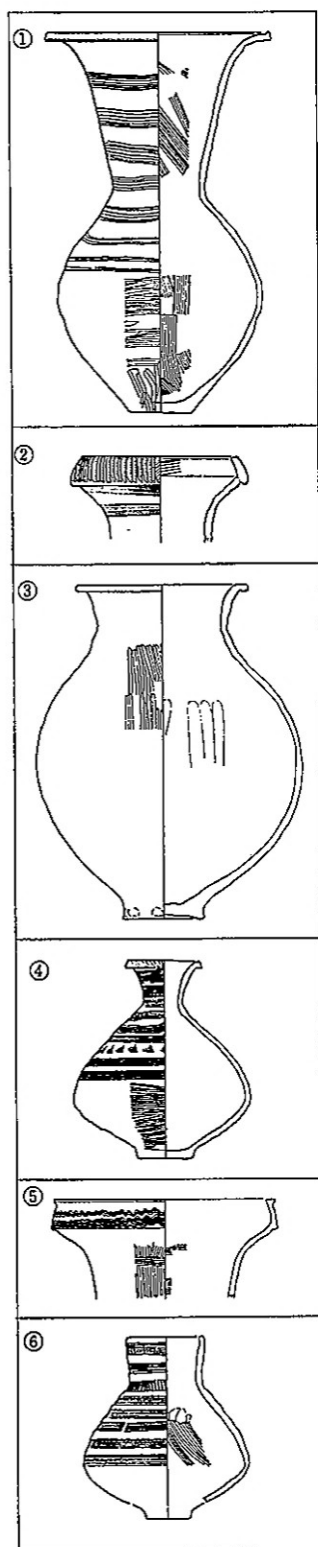
茶褐色を呈し、雲母、角閃石等を含む胎土をもつ土器が、従来「河内の土器」（ここでは生駒西麓の土器としている）と呼ばれ、中河内を中心に分布し、中河内に属する遺跡から一般的に出土する土器であった。しかし、亀井遺跡出土の土器を整理していく中で、この土器が少ないことがわかってきた。何故、少ないのか。亀井遺跡で土器を作ったことを前提にすると、単純に考えて一番多く出土している土器が亀井産ということになる。生駒西麓の土器は少ないことから亀井産とは考えられない。亀井産の土器はどれかということになる。

亀井遺跡出土の中期の土器は、灰または淡褐色、淡赤褐色を呈し、1～3mm大の石英、白色砂粒等の砂粒を含む（第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式になると細粒砂のものが多くなる）土器が6割弱、生駒西麓の土器が3割前後、暗茶褐色を呈し密なヘラミガキを施す土器（第Ⅲ様式古段階は目立つものであるが、胎土は1mm大の粗粒砂を含むものと細粒砂のものがある。この違いは甕の調整にあらわれ、前者はヘラミガキ、後者はヘラナデ、ナデが多い。）等が1割前後である。

灰色または淡褐色、淡赤褐色を呈する土器の中で灰色または淡褐色を呈するものが7割を占める。灰色または淡褐色を呈する土器と淡赤褐色を呈する土器との調整方法に明らかな相異点は見つからない。例えば、第Ⅲ様式古段階の甕の調整は、外面ハケメが多くヘラミガキ等がついで多く、内面ナデが多くハケメもある。このことは両者にいえる。そのため、本稿では、亀井遺跡で一番多く出ている土器として両者を一括して扱いたい。後日、細密な観察で、成形技法、調整方法、施文方法の違いや胎土分析等で結着がつけばと思う。

又、灰または淡褐色、淡赤褐色を呈する甕の調整と他遺跡の甕の調整を比べてみた。時期はやや新しくなるが、国府遺跡の第Ⅲ様式新段階とされている一括遺物の甕の調整は、外面ヘラミガキが主で、ナデ、ハケメもあり、内面はナデとハケメである（山本 1974）。瓜生堂遺跡の甕の調整は、内外面ハケメが多く、外面下半部をヘラケズリするものが多い（岩崎・藤沢・上西 1980）。このように内外面の調整が少しずつ違っている。

以上、一番多く出土していること、他遺跡と異った調整が見られることから、亀井産の土器と仮定して、灰または淡褐色、淡赤褐色の土器の器種構成、調整の特徴を述べてみたい。以下これらの土器を亀井の略からKMとする。資料としては、凹線文が出現しない土器群として比較的把握しやすいこと、SD3029で一括出土し、SD3013、SD3004からも多量に土器が出土していることから、3遺構出土の第Ⅲ様式古段階を中心に扱った。そして、土器の器種構成や特徴をより明確にするため、土器の説明では省略したが、形態から分類を試みた。



第325図 壺のタイプ分類

2 器種別説明

a 壺

①は、球形の体部に長い筒状の頸部をもち、外反する口縁部をもつ。KMの壺全体に占める①は4割弱である。口径22~25cm、27~30cmが多く、口縁端部を下方に拡張するものが2割ある。口縁部に刻目を施すものと波状文を施すものが多い。外面頸部から腹部にかけて、ハケメ調整の上に直線文を飾り、下半部はヘラミガキ調整、内面はハケメ、ナデ調整が多い。

②は、算盤玉形の体部に短い筒状の頸部をもち、外反する口縁部をもつ。KMの壺に占める割合は2割弱である。口縁端部を下か上下に拡張する。口径は15~10cmのものが多い。拡張した口縁端部に列点文、波状文を施し、頸部や肩部に直線文を施す。調整は、口頸部しか確実に存在しないので全体は不明であるが、頸部外面がハケメ、内面はヨコナデである。

③は、無花果形の体部に短い筒状の頸部をもち水平気味に屈曲する口縁部をもつもので、無文が多い。KMの壺全体に占める割合は3割強である。口径17cm前後と20cm前後が多い。調整は、外面ハケメのものとヘラミガキのものがある。内面は、ナデ、ハケメ、ヘラミガキの3種類がある。

④は、算盤玉形の体部に短く細い筒状の頸部をもち、外反する口縁部をもつ。端部は下に拡張する。KMの壺全体に占める割合は1割弱である。口径7cm代、10cm代で、口縁端部に列点文、簾状文、直線文をそれぞれ施し、頸部から腹部にかけて直線文、扇形文を施す。調整は、外面横ヘラミガキ、内面はナデである。

壺のタイプとしては、この他に第Ⅲ—Ⅳ様式新段階になると、⁽¹⁾⑤、⑥が出土する。⑤は算盤玉形の体部に外反する頸部から稜をもち直口する口縁部をもつ。亀井では少なく数点である。他遺跡では多いものである。⁽²⁾調整は、内外面ハケメが多い。⑥は、算盤玉形の体部に直口する短い口頸部をつける。3点を確認する。調整は、内外面ナデ調整が多い。

KMの壺は、第Ⅱ、Ⅲ様式古段階では①、③が多く、第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式は③が主になる。調整の動向は、第Ⅲ様式古段階では、外面頸部から体部上半部はハケメが多く、ヘラミガキもついで多い。下半部はヘラミガキが多く、内面は頸部がナデ、体部

はハケメ、ナデが多い。第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式になると、外面は頸部から体部上半部ハケメが多く、内面頸部はナデが多く、ハケメもついで多い。内面にナデが多用される。

b 甕

①は、胴の張らない体部になだらかに外反する口縁部をもち、資料中ではわずか1点である。口径18.4cmで、調整は外面ヘラケズリ、内面ナデである。

②は、やや胴の張る体部に「く」の字に外反する口縁部をもつ。KMの甕全体に占める割合は7割強である。口径15、6cmのものが多く、調整は、外面ハケメが多く、内面はナデ、ハケメが多く、ハケメを施した後ナデるものもある。

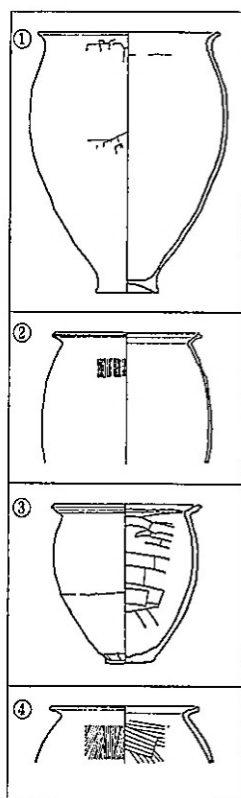
③は、②と同じく「く」の字に外反する口縁部をもつが、口縁部の長さが2に比べ短く、作りが雑で小形である。KMの甕全体に占める割合は2割強である。小形のもの第Ⅱ、Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式にもあるが、作りが雑でないことから別に考えると、第Ⅲ様式古段階に目立つものである。口径14~16cm前後が多い。調整は、外面ヘラケズリがやや多く、その上にナデやヘラミガキを施すものもある。内面はほとんどナデである。

KMの甕のタイプとしては、この他に④がある。第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式に多くなる。④は、胴の張る体部に水平に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部を上方につまむものが多い。口径13~5cmのものが多く、調整は、内外面ハケメが多い。

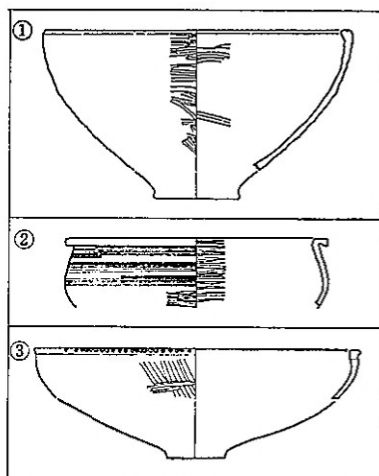
KMの甕は、第Ⅱ様式では①が多く、②がついで多い。第Ⅲ様式古段階では②、第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式では②、④が主になる。調整の動向は、第Ⅱ様式では外面ハケメが多く、内面はハケメとナデが中心を占め、第Ⅲ様式古段階では、外面ハケメが多く、ヘラケズリ、ヘラミガキがつぎ、内面はナデが中心になる。第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式では、内外面ハケメが多くなる。

c 鉢

①は、底部からなだらかなカーブをもって立ち上がる椀状を呈し、口縁端部を内外へやや肥厚



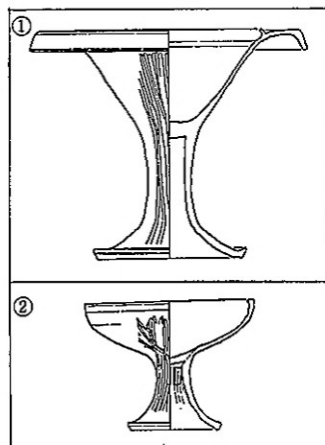
第326図 甕のタイプ分類



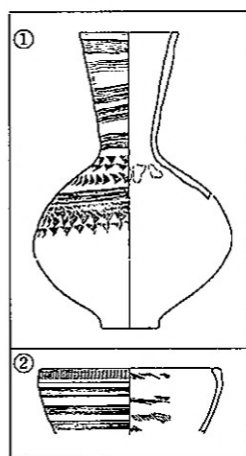
第327図 鉢のタイプ分類

するものが多い。KMの鉢全体に占める割合は6割である。口径20cmまでのものと30cm以上の大小がある。無文のものが多いが、口縁部に列点文、刻目を施すものもある。調整は、内外面横ヘラミガキが多い。

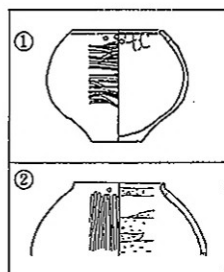
②は、底部から外に開き、腹部で屈曲して内傾する体部をもち、水平気味に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部を下に拡張するものもある。KMの鉢全体に占める割合は3割強である。口径23



第328図 高杯のタイプ分類



第329図 細頸壺のタイプ分類



第330図 無頸壺のタイプ分類

～6cmが多く、体部外面は直線文を施すものも多く、波状文、簾状文も施す。調整は、内外面横ヘラミガキが多い。

③は、底部から大きく外に開く下半部から腹部で屈曲し、直口する口縁部をもち、端部は外に肥厚する。資料中では1点だけである。口径33.8cmで口縁部に刻目を施す。調整は、外面ハケメ、内面ヨコナデである。

KMの鉢のタイプとしては、この他に第Ⅱ様式に埴状の体部に外反する口縁部をもつものがあり、第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式に把手付鉢と段状口縁部をもつ②が出土する。

第Ⅱ—Ⅳ様式通じて①が主で、第Ⅲ様式古段階で②が同量ぐらいにます。調整は内外面ヨコヘラミガキが多い。

高杯・細頸壺・無頸壺の出土点数が少なく、本来の姿に程遠いかもしれないが一応まとめてみることにする。

d 高杯

①は、水平口縁部をもつものである。口縁端部を垂下する。KMの高杯全体に占める割合は7割弱である。口径27～30cmが多く、無文である。調整は、外面杯部から脚部が縦ヘラミガキ、内面は杯部がヘラミガキ、脚部上半にしぼり目が見られ、裾部はヨコナデが多くヘラケズリもある。

②は、外に開く体部から屈曲して直口する口縁部をもつ。資料中では2点である。口径14.8cmと17.2cmである。無文である。調整は、外面杯部から脚部が縦ヘラミガキ、内面杯部がヘラナデ、脚部はしぼり目が見られるものと上半中実のものがある。

第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式になると、①、②の高杯に占める割合は逆転し、②が8割とふえ、口縁部外面に凹線文を施す。

e 細頸壺

①は、球形の体部に細長く直口する口縁部をもつ。口径5cm代と10cmがあり、口頸部に直線文を飾る。肩部から腹部にかけて直線文、扇形文を施すものもある。調整は、外面がナデのもの

のとハケメのものがあり、内面はナデである。

②は、胴長の算盤玉形の体部に、やや短い直立の口頸部をもち、口縁部はやや内彎する。口径8cm前後で、口縁部に直線文、列点文を施す。調整は、口頸部しか残存しないので全体は不明であるが、口頸部外面ヘラミガキ、内面ナデ、ハケメのものがあつた。第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式になると口径20cm近くに大形化し、出土量が多くなる。

f 無頸壺

①は、球形の体部をもち、内傾する口縁部をもつ。明確には2点出土し、口径9cm代で無文のものと直線文で飾るものがある。調整は、外面横ヘラミガキ、ナデ、内面ナデがある。

この他に、②がある。②は、算盤玉形の体部に短く外反する口縁部をもつ。第Ⅲ—Ⅳ様式新段階には明確に存在する。口径9cm代、15cm代で、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ調整である。

以上が、第Ⅲ様式古段階を中心にしたKMの器種別の概観で、これらの器種に第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式になると、水差・器台が新しく出現する。

第Ⅲ様式古段階のKMの調整は、壺・甕・鉢等により違いはあるが、概していえば、ハケメが多く、ハラミガキ、ナデがついで多い。KMの調整と他地域の土器の調整を同時期、同器種別に比べてみた。各器種の中で調整に差があつたのは甕であつた。甕②を例にとってみる。KMの調整は、外面ハケメ、内面ナデ、ハケメが多く、ハケメの後ナデのものもある。和泉・池上遺跡の土器は、内外面ハケメが多く、外面に底部から腹部方向へヘラケズリする（井藤他 1980）。摂津・勝部遺跡の土器は、第Ⅲ・Ⅳ様式のもの一括してであるが、上腹部ハケメ、下腹部ヘラミガキ調整である（小型）（豊中市教委 1972）。中河内・瓜生堂遺跡の土器は、第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式のものと思われるが、内外面ハケメで外面下半部ヘラケズリ調整が多い（小型）（岩崎・藤沢・上西 1980）。生駒西麓の土器は、内外面ヘラケズリ調整が多い。

比べてみてわかるように、甕②の調整は、内外面ハケメが多いが、外面下半部がヘラケズリであつたり、ヘラミガキであつたり、それぞれ少しずつ特徴がある。KMの外面下半部の調整は、ヘラミガキ、ナデ等であり、残存するものが少ないこともあって特徴としてあげることが出来ない。がわってKMの甕②の調整の特徴にあげることが出来るのは、内面ナデ又はハケメののちナデが多いことである。

3 まとめ

色調が灰または淡褐色、淡赤褐色を呈し、胎土が1～3mm大の石英、白色砂粒等の砂粒を含む土器を器種別に説明してきた。その器種構成をもう一度ここでまとめてみる。第Ⅱ様式では、壺①、③が多く、甕①が多く②がついで多く、鉢①、無頸壺①があり、高坏は今のところ不明である。第Ⅲ様式古段階では、壺①、③、甕②、鉢①、②、高坏①が多く、細頸壺①、②、無頸壺①がある。第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式では、壺③が多く②がついで多く、甕②が多く④がついで多

く、鉢①、高坏②、細頸壺②が多く、無頸壺①、②がある。

第Ⅲ様式古段階のKMの調整は、ハケメが多くヘラミガキ、ナデがついで多い。他地域の土器と比較して、特に甕②の調整の特徴は、内面ナデ、ハケメののちナデが多いことである。

しかし、非常に大まかな目でしか分類出来ず、調整も見ることが出来なかった。そのため調整工具等の細密な調整の特徴を見つけることが出来なかった。

4 今後の課題

今回は、色調、胎土で分類し、一番多く出土していることから亀井産と仮定した土器に特徴的で細密な調整手法を見つけることが出来なかった。私は、同時期、同形態で同集落（亀井遺跡を1つの集落とする）で作られた土器は、何らかの特徴をもつと考えている。そのために、調整手法はもちろん、成形技法、施文方法等を細密に観察し、亀井産といえる特徴をつかみたい。今回、それらが比較的に見つけやすいのではと思ったのは甕であるが、他の器種、各時期についても観察を広げたいと思っている。

又、外見上の色調・胎土の分類とその胎土分析の結果がどう結びつくか調べてみたい。

〔註〕

- (1) 資料として、第Ⅱ様式はSD3014、第Ⅲ様式新段階ⅠⅣ様式はSD3040、SD3023、SK3040、SK3041を中心に使った。確実な第Ⅱ様式のもの少なく、第Ⅱ様式の全体像は出ていないかもしれない。
- (2) 例えば、(岩崎・藤沢・上西 1980)のB地区溝29出土の広口壺形の3割を占める。もっともここで②としたタイプとあわせた数なので割合は違ってくると思うが、多いことは確かである。

〔引用文献〕

- 井藤暁子・藤田雅子・上西美佐子・清原弘美 1979 「池上遺跡」第2分冊 土器編 大阪文化財センター
- 上西美佐子・岩崎二郎・藤沢真依 「B地区の調査」「瓜生堂 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」 大阪府教育委員会 大阪文化財センター
- 豊中市教育委員会 1972 「勝部遺跡」
- 山本雅晴 1974 「河内国府遺跡出土の弥生式土器——土坑出土の土器群の紹介とその製作技術について」 大阪文化誌 第1巻第3号